

多様な人々の人生・生活を想像する —ワークショップ：日本で「外国人」になるってどんな感じ？—

古屋憲章・松本明香・寺浦久仁香・櫛田ひかる・伊藤茉莉奈

要旨

本稿は、「ワークショップ：日本で「外国人」になるってどんな感じ？」（以下、WS）に関する報告である。共生社会の実現に向け、日本語母語話者に対し、多様な人々の人生・生活を想像することを促すような働きかけを行うこともまた日本語教師の役割である。このような働きかけは、日本語非母話者と日本語母語話者を「仲介」（欧州評議会 2024）する営みでもある。WS は参加者が多様な人々の存在を知るとともに、多様な人々の人生・生活を自分の人生・生活と照らし合わせながら、想像することを目的に行われた。具体的には、日本に住む外国人によって書かれた体験談を媒介に参加者同士で話し合いを行った。WS 終了後、筆者らで WS に関し、ふりかえりを行った。ふりかえりにおける発言は、A. WS の参加者に関する気づき、B. WS で扱った体験談に関する気づき、C. 日本語教師に関する気づき、D. ファシリテーションに関する気づきの四つに分類された。

キーワード

共生社会、日本語教師の役割、対話、想像力、仲介

1. 問題意識

1.1 日本語教師の役割に関する議論

近年、日本においては、外国人材の受け入れ拡大にともなう日本語教育の制度化が急速に進行している。具体的には、2019 年 6 月に「日本語教育の推進に関する法律」（以下、「日本語教育推進法」）が制定されたことにより、日本語教育の推進が国、地方公共団体、事業者の責務であることが明示された。また、2024 年 4 月に「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律」（日本語教育機関認定法）が施行されたことにより、日本語教育機関の設置基準を整備するとともに、日本語教育機関で日本語教育に携わる者のための国家資格「登録日本語教員」が創設された。

このように日本語教育の制度化が進展するにともない、日本語教育の担い手となる日本語教師の役割に関する議論も活発になっている。例えば、古賀他（2021）では、文献調査にもとづき、日本語教師の役割に関する言説に関し、次のように論じられている。

- ・日本語教師の役割に関する言説は、「A. 学習を管理する」→「B. 自律的な学習を支援する」→「C. 相互学習の場を設計する」→「D. 学習環境・システムを整備する」と変遷している。
- ・A～D の言説は、後から現れた言説がすでにある言説に取って代わっているというわけではなく、2000 年代以降においても並立している。
- ・働きかける対象という観点からみた日本語教師の役割は、学習者に直接日本語を教える

ことから、社会環境を変革・構築していくことへと広がっている。(pp. 50-52)

また、上述した「日本語教育推進法」では、第三章第一節「国内における日本語教育の機会の拡充（第十二条―第十七条）」において、外国人児童生徒、外国人留学生、外国人労働者、難民、外国人住民に対する日本語教育機会の拡充に加え、日本国民に対し、日本語教育に対する理解と関心を深める必要性に関しても、次のように言及されている。

（国民の理解と関心の増進）

第十七条 国は、国内における日本語教育が外国人等の日本語能力を向上させるとともに、共生社会の実現に資することを踏まえ、外国人等に対する日本語教育についての国民の理解と関心を深めるよう、日本語教育に関する広報活動の充実その他の必要な施策を講ずるものとする。

つまり、共生社会を実現するためには、日本語非母語話者（条文では外国人）が日本語を学習するだけでなく、日本語母語話者（条文では国民）もまた日本語教育、ひいては日本語学習や日本語学習者に対する理解を深める必要があるということである。

古賀他（2021）でも論じられているように、特に 2000 年代以降、日本語教師の役割として、「社会環境を変革・構築していくこと」が主張されている。これを踏まえれば、共生社会の実現に向け、日本語母語話者に対し、日本語学習や日本語学習者に対する理解を深められるような働きかけを行うこともまた日本語教師の役割であると言えよう。

1.2 筆者らが考える日本語教師の役割

筆者らは、「日本語教師の専門性を考える研究会」（以下、NKS 研究会）⁽¹⁾のメンバーとして、日本語教師の専門性をテーマとする研究や日本語教師を対象とするワークショップの企画・運営に携わっている。NKS 研究会とは、日本語教師の専門性、すなわち「日本語教師は何をする人か」（古屋他 2021、p. 263）を問い直す会である。

日本語教師には、一般に教室で外国人に日本語を教える人というイメージがある。筆者らは、NKS 研究会における一連の活動、あるいは研究会内での議論をとおり、日々外国人と接する日本語教師には、日本語を教えることとは別に共生社会の実現に寄与するという役割もあるのではないかと考えるようになった。筆者らが考える共生社会とは、一人ひとりが固有の文化を有する唯一無二の存在であるという認識にもとづき、多様な人々、外国人も日本人も、対等な関係性の中で自分らしく暮らせる社会である。日本を共生社会とするためには、多様な人々がお互いに自身の文化（固有の経験、それにもとづく固有の価値観）を表現し合うことをとおし、お互いを個人として理解し合えるような場が必要である。こうした場を構築するための前提として、日本において多数派を構成する日本語母語話者が多様な人々の人生・生活を自分の人生・生活と照らし合わせながら、想像することをおして理解しようとする必要がある。それゆえ、共生社会の実現に向け、日本語母語話者に対し、多様な人々の人生・生活を想像することを促すような働きかけを行うこともまた日本語教師の役割であると言えよう。

日本語教師による日本語母語話者に対する働きかけは、いわば日本語非母語話者と日本語

母語話者を「仲介」（欧州評議会 2020）する営みである。CEFR-CV では、「仲介」に関し、次のように説明されている。

仲介では、言語使用者／学習者は社会的行為者として、意味の構築や伝達のために橋渡しをしたり手助けを行う。それは、同じ言語内の場合もあれば、ある言語から別の言語への場合もある。仲介の中心関心は、コミュニケーションと学びの空間や環境を創出したり、新しい意味の構築に向けて協働したり、新しい意味の構築や理解を他者に促進したり、適切な形式で新しい情報を伝えたりというようなプロセスを促進させる言語の役割である。（p.90）⁽²⁾

こうした「仲介」の概念を踏まえ、筆者らは、「新しい意味の構築に向けて協働したり、新しい意味の構築や理解を他者に促進したり」することにより、日本語教師として共生社会の実現に寄与するという役割を担うべく、日本語母語話者が多様な人々の人生・生活を想像するためのワークショップ（以下 WS）を試みることにした。

2. 多様な人々の人生・生活を想像するためのワークショップ

前章の末尾で述べた WS は、2024 年 11 月 10 日に明治大学中野キャンパスにおいて、6 名の実施者により、3 回に分けて実施された。延べ参加者数は 27 名（3 回の合計）であった。WS の概要は次の表 1 のとおりである。

表 1 WS の概要

タイトル	ワークショップ：日本で「外国人」になるってどんな感じ？
チラシに掲載した広報文	あなたは「外国人」になったことがありますか。 このワークショップでは、日本で暮らす外国人の方の体験談を読んで、話し合います。 外国の方の困難、違和感や戸惑いを想像してみましょう。 で、あなたは日本で「外国人」になりたいですか。
開催日時	2024 年 11 月 10 日（日）11:30～15:00
開催場所	中野ダイバーシティフェスタ 2024 内 明治大学中野キャンパス 307 教室
WS の目的	1) 多様な人々の存在を知る。 2) 多様な人々の人生・生活を自分の人生・生活と照らし合わせながら、想像する。
WS の流れ	①《個人ワーク》各自で（使用教材に収録されている）日本で暮らす外国人の方の体験談を読む ②《グループワーク》3～4 名のグループで体験談を題材に話し合う ③《全体ワーク》外国の方の困難や戸惑いについて話し合う ※グループで話されたことを報告するのではなく、話し合いを経て、考えたことを話したい人が話す。

WS の実施者	NKS 研究会の有志 6 名 ※WS1 回を 2 名で担当した。担当者は WS の司会およびファシリテーションを行った。
使用教材	八木真奈美編著 (2022)『話す・考える・社会とつなぐためのリソース わたしたちのストーリー』ココ出版 ストーリー4 漢字、覚えたい ストーリー10 敬語じゃないと、やっぱり失礼だよ ストーリー14 日本語を学ぶことは、きれいで正しい日本語が話せることですか
想定参加者	外国人と接した経験があまりない人

本 WS は、中野ダイバーシティフェスタ（以下、NDF）2024⁽³⁾⁽⁴⁾内で実施された。NDF とは、東京都中野区で活動する任意団体である中野ダイバーシティウォッチャーズ⁽⁵⁾の主催により 2023 年から開催されているイベントである。NDF の Web サイトでは、NDF に関し、次のように紹介されている。

中野区が、そこに住む・働く・学ぶ全ての人の性的多様性、年齢や世代の多様性、様々な障害の有無、出身国や地域による多様性を受け入れ、大切にすることで、多様な区民のつながりと支え合いの風土が育まれ、誰もが自分らしく、生き生きとした人生を歩むことができるまちになることを目指すために、年に 1 回、ダイバーシティの祭典として、「中野ダイバーシティフェスタ」を開催しています。

具体的には、ダイバーシティに関係する活動を行っている団体が、自らの活動紹介、ダイバーシティに関する意識を高めるための展示、アクティビティ、ワークショップ等を出展する。NKS 研究会のメンバーの一人が NDF の運営に携わっていたことから、本 WS を NKS 研究会の有志により NDF に出展することにした。

使用教材とした八木（2022）には、「日本に移住されてきた方が語った実際の語り」（p. 8）が 15 のストーリーとして、ほぼそのまま掲載されている。WS を計画するにあたり、八木（2022）に掲載されている体験談の中から、日本語という母語ではない言語の使用を余儀なくされながら生活することの困難さが参加者に想像されやすいと思われるストーリーを選定した。

本 WS は同日に全 3 回実施した。各回の開始前には、NDF 会場でチラシ（図 1）を配布するなどして、WS への参加者を募った。そして、各回の冒頭で WS の主催団体および使用教材の説明を行った後、WS の流れに関し、次のような説明を行った。



図 1 WS のチラシ

- ① 日本で暮らす外国人の方の体験談を読む
 - ② グループ→全体で体験談について話し合う
 - ③ 一言メッセージ（感想など）を付箋に書いて貼る
- ワークショップを通して考えたことや感想などを一言、共有する。

なお、②に関しては、主に体験談の中でわかりにくかったところはどこか、どこが印象に残ったか／気になったか／共感したかが話し合われた。

上述したように、本 WS は全 3 回実施された。1 回の実施時間は 30 分で、各回の参加人数はそれぞれ 13 名、6 名、7 名であった。WS では、日本で暮らす外国人の方の体験談を題材に参加者間で話し合った。各回でそれぞれ異なる体験談を題材とした。WS 各回の詳細は次の表 2 のとおりである。

表 2 WS 各回の詳細

【第 1 回】	
時間	10:30～11:00
題材にした体験談	「漢字、覚えたい」：〈要約〉生活するうえで必要なので、漢字を覚えたいと思っているがなかなか難しい。
参加人数	13 名
【第 2 回】	
時間	11:30～12:00
題材にした体験談	「敬語じゃないと、やっぱり失礼だよ」：〈要約〉年配の方に普通の日本語で話していて、注意された。そういうときは敬語じゃないとだめだとわかっていても難しい。
参加人数	6 名
【第 3 回】	
時間	13:00～13:30
題材にした体験談	「日本語を学ぶことは、きれいで正しい日本語が話せることですか」：〈要約〉最初は日本人らしい日本語を話したいと思って頑張っていたが、今はそこまで完璧な日本語を求めなくてもいいと思うようになった。そのことに教える人も、学ぶ人も気づければ、もっと楽しくできると思う。
参加人数	7 名

本 WS における各フェーズで、WS の実施者はそれぞれ次のような役割を担った。

- ・ WS の流れの説明時：参加者全員に対し、説明する。
- ・ グループ活動時：基本的に話し合いに介入せず、各グループでの話し合いを見守る。
- ・ 全体活動時：参加者に発言を促す、参加者の発言を要約する、参加者の発言に対しコメントする等、話し合いのファシリテーションを行う。

3. 日本語教師が日本語母語話者に働きかける教育実践に関する省察

WS 終了後、筆者らでふりかえりを行った。具体的には、主に今回実施した WS の内容が目的に合致していたかという観点でそれぞれ気づいた点を話した。そのうえで、話した内容を踏まえ、今後どのように日本語教師が日本語母語話者に働きかける教育実践を行っていくかに関し、話し合った。ふりかえりにおける発言は大きく次の 4 点に分けられる。

- A. WS の参加者に関する気づき
- B. WS で扱った体験談に関する気づき
- C. 日本語教師に関する気づき
- D. ファシリテーションに関する気づき

以下、A～D のそれぞれに関し、具体的なコメントを紹介する。⁽⁶⁾

【A. WS の参加者に関する気づき】

- ・「日本語教育」や「外国人」のキーワードで興味を持った方が来ていたようだった。
- ・日本語教育に関心のある人が集まっていた。そのため、参加者の日本語非母語話者に対する目線も似ていた。
- ・WS の会場となった教室は、メイン会場となったフロアのエレベーター付近に位置していた。そのため、会場付近には、動線上、常時多くの人が行き来していた。また、教室がガラス張りであったため、参加者の目に留まりやすかった。さらに、同じ教室に外国人に関係する展示が配置されていたため、日本語教育／外国人に関心がある方が同会場に集まっていた。
- ・グループワークはあたたかい雰囲気だった。たまたまその時間に集まったという関係性であったにもかかわらず、皆に対話しようとする姿勢が見られた。
- ・外国人に関心がある人への働きかけとしては意味があったのではないか。
- ・「外国人にとっての困難点（漢字にルビがないこと等）がよりイメージできた」「日本語使用に対する気づき（敬語を使う上での親疎関係、上下関係等）があった」という意見が聞かれた。共生社会に意識が向いている人たちが、さらに共生社会を実現していくための、小さな気づきを得ることができた場だったのではないか。
- ・そもそも共生社会に意識が向いている方々が集まっていたように思う。そのため、共生社会への意識を促すということができたかという点では課題が残った。
- ・普段、日本語教育や外国人に関心がない方の参加を想定していたが、関心がない方の参加はなかった。もっと関心がない方に参加を呼びかけたほうがよかった。
- ・外国人との共生に興味・関心のない人に来てもらうにはどうすればいいかを考える必要がある。

【B. WS で扱った体験談に関する気づき】

- ・今回は中野ダイバーシティフェスタという枠組みの中で WS を行ったが、独自に WS を開催した場合、どのような方々が集まるのか興味がある。自分としては、共生社会に対し

てあまり意識が向いていない人とも対話を試みたい。WS の内容として、今回の教材に掲載されている体験談を扱ってもいいし、他の本に掲載されている体験談を扱ってもいい。また、私たちの経験や私たちと学生の経験をもとに、ストーリーを作ってもいいし、参加者に自身の体験を語ってもらってもいい。とにかくもっと自由にいろんなことを話してみたい。

- ・三つのストーリーを扱ってみて、自分の経験から話せるテーマの方が発言しやすいということがわかった。例えば、三つ目の「日本語を学ぶことは、きれいで正しい日本語が話せることですか」は、言語学習、言語習得にどっぷり浸かった経験がある方は活発にお話をされていた。一方で、あまりそのような経験がない方は、ストーリーを読んで、「そうだね」と理解はするものの、「そんなに気にしていないよ」という反応で、あまり意見が出なかった。
- ・今回は言語寄りの体験談を扱ったが、生活寄りの体験談を媒介としたほうが想像して話せることが多かったのかもしれない（言語寄りの体験談を扱うことで、「日本語教師」が本 WS をやる意義が生まれるという面もあるが）。
- ・言語（日本語）に関する体験談だけではなく、より広く日本で生活をしていくうえで困っている全般に関する体験談を取り上げてもよかったかもしれない。

【C. 日本語教師に関する気づき】

- ・「敬語じゃないと、やっぱり失礼だよ」を扱った際、「敬語じゃなくても大丈夫」という声が多かった。この声を聞いて、日本語教師のほうが保守的かもしれないと思った。ビジネスとして外国人（留学生）に関わっている人の中にこそ、「敬語を教えなければならない」と懸命になるあまり、かえって日本語学習者、あるいは学習者が使用する日本語が多様であることに対する配慮がない人がいるのかもしれない。

【D. ファシリテーションに関する気づき】

- ・ワークショップをやってみると気づきが多く、取り扱ったテーマについて参加者と一緒に考える意義を実感した。ファシリテーターがなぜこの話題を選んだのかという理由をはじめに話しても良かったかもしれないと思った。
- ・全体共有のまとめ方、話してもらったことへのコメント、発言と発言のつなぎ方などに関しては、個人的には課題が残った。

4. 今後の課題と展望

4.1 今後の課題

2章で述べたように、本 WS は次の2点を目的として行われた。

- 1) 多様な人々の存在を知る。
- 2) 多様な人々の人生・生活を自分の人生・生活と照らし合わせながら、想像する。

3章で述べた省察からもわかるように、本 WS は概ね 1)2)の目的に沿った活動であったと言えよう。一方で、今後に向け検討すべき次のような課題も見えてきた。

(1)WS の参加者に関する課題

省察において、参加者として外国人と接した経験があまりない人を想定していたにもかかわらず、実際の参加者にそのような人は見られなかったという指摘が見られた。NDF のようなイベントに主体的に参加しようとするような人は、「共生社会に意識が向いている人」であろう。そして、たしかにそうした「共生社会に意識が向いている人」が他者との対話をとおして、更に意識を高める場として、本 WS は有効であったと言える。一方で、真に共生社会を目指すのであれば、むしろ「外国人との共生に興味・関心のない人に来てもらうにはどうすればいいか」を考える必要がある。むしろ単発の WS で外国人との共生に興味・関心のない人の意識が変わることは期待できない。しかしながら、共生社会の実現を目指す以上、それらの人々への地道な働きかけは不可欠である。

(2)WS で扱うケース（体験談、ストーリー）に関する課題

本 WS において、ケースは参加者に共生社会に関する省察や発言を促すための重要な媒介である。省察において指摘されているように、参加者にとっては「自分の経験から話せるテーマ」のほうが発言しやすい。一方で、WS の開始時には、個々の参加者がどのような経験をしてきたかはまったくわからない。そこで、今後 WS を行う際には、参加者にまずは共生社会に関連する自身の経験を語ってもらったうえで、語られた内容に応じて、WS で扱うケースを選択するといった運用も考えられる。

4.2 今後の展望

日常的に日本語学習者に接する日本語教師は、日本語非母語話者が抱える日本語に対する不全感を想像しやすい存在である。一方で、日本語教師は日本語を母語とする、日本における言語的マジョリティでもある。つまり、日本語教師はマイノリティ⇄マジョリティ間を往還するマージナルな存在である。それゆえ、日本語教師は、共生社会の実現に向け、多様な人々を「仲介」、すなわち「新しい意味の構築に向けて協働したり、新しい意味の構築や理解を他者に促進したり」する場を構築する存在となり得る。筆者らは、今回行った WS を踏まえ、今後も体験談を含む様々な媒介を活用しつつ、日本語母語話者に対し、日本語非母語話者が日本語社会で生活する際に生じる困難や戸惑いを含む人生・生活を想像できるような働きかけを行う場を創出していくつもりである。

(古屋憲章・ふるやのりあき・帝京大学・frynarak@gmail.com)

(松本明香・まつもとはるか・東京立正短期大学・matsumoto@tokyorissho.ac.jp)

(寺浦久仁香・てらうらくにか・武蔵野美術大学・jt-teraura@teran.jp)

(櫛田ひかる・くしだひかる・早稲田大学・kushida.hikaru@asagi.waseda.jp)

(伊藤茉莉奈・いとうまりな・東京経済大学・aroma1107@toki.waseda.jp)

注

1. 「日本語教師の専門性を考える研究会（NKS 研究会）」Web サイト：<<https://nihongo-kyoshi-senmonsei.com/>>

2. 日本語訳は櫻井・奥村（2024、p. 105）による。
3. 「中野ダイバーシティフェスタ2024」Webサイト：<<https://diversity-festa.org/>>
4. 多様性を受け入れるまち・中野を目指して「中野ダイバーシティフェスタ 2024」レポート<<https://heart-design.jp/report/post-4882/>>
5. 「中野ダイバーシティウォッチャーズ」Web サイト：<<https://diversity-watchers.net/>>
6. ふりかえりの際にとったメモを転載した。一部わかりにくいと思われる表現に関し、内容に影響しない程度に修正を施した。

参考文献

- 欧州評議会（2020）『言語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 随伴版』
欧州評議会出版部（©Council of Europe2020-英語版，©Goethe-Institute Tokyo2023-日本語版）
- 古賀万紀子・古屋憲章・孫雪嬌・小畑美奈恵・伊藤茉莉奈（2021）「第 3 章 日本語教師の役割をめぐる言説の変遷」，館岡洋子（編）『日本語教師の専門性を考える』ココ出版，41-54.
- 櫻井直子・奥村三菜子（2024）『CEFR-CV とことばの教育』くろしお出版
- 古屋憲章・古賀万紀子・小畑美奈恵・孫雪嬌（2021）「おわりに NKS 研究会の軌跡と本書の出版に至る過程」，館岡洋子（編）『日本語教師の専門性を考える』ココ出版，263-271.
- 八木真奈美（編著）（2022）『話す・考える・社会とつなぐためのリソース わたしたちのストーリー』ココ出版